

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第175回哲学カフェ例会(2023,1.12)

《新年の抱負、展望を語る》

「ほんとうに厳しい<大転換>の時期になってきましたね。皆さんの意見も何とか打破したいという思いと、ちょっと難しいなという思いが複雑の絡み合っていたようです。でも、あきらめてはすべて終わりです。気を持ち直してしっかり前に進みましょう。」

<話題提供> 主宰者:吉田千秋

・明けましておめでとうございます。今日は、希望や抱負を語り合いながら、今年一年を展望したいと思います。最初に取り上げたい心配は、言うまでもなく出口の見えないウクライナ戦争と、これに乗じた日本政府の専守防衛から攻撃型防衛政策の<大転換>です。この問題に対して正月のマスコミ、メディアの論調は真正面からの批判が大変弱く、大変心配です。

・NHKは元日に「世界は平和と秩序を取り戻せるか」というタイトルで、世界の著名人7人(ノーベル賞作家のスベトラナ・アレクシエビッチ氏や国連事務次長を務める日本の中満泉等)のインタビューが放映されました。ここで取り上げられた第一の課題はやはり、世界の安全保障を脅かしているウクライナ戦争をどう解決するのかがでした。続いて、ウクライナの戦争の影響で生じたエネルギー危機があり、地球温暖化(脱化石燃料)の課題でした。さらにこの戦争の余波で生じた、アフリカの発展途上国だけでなく、先進国にも及んだ深刻な食糧不足の課題です。加えて、プーチン大統領が核兵器の使用をちらつかせていますが、核の脅威をどのように取り除くことが出来るかという大きな課題があります。

・私たちは今何をする必要がありますのでしょうか。戦争の惨禍を最小限にとどめるために紛争を外交的に解決する道を探さなければなりません。日本の安全保障は果たして防衛力向上の名の下に、仮想敵国に脅威を与える大軍拡を進めることで実現されるのでしょうか。日本はエネルギーや食糧を外国に頼らざ



吉田主宰と大橋運営委員長

るを得ない国であることを忘れてはなりません。被爆国として憲法9条を守って、核廃絶に努力することが日本の責務だと思います。

・にもかかわらず心配なのは、安倍政権以来、政府が国会を軽視し、反対意見を聞かない、情報を提供しない、しっかり議論しない状況が続いています。加えて、マイナンバーカードの半ば強制的な導入等を通して、行政が国民を監視、管理しようとする傾向も強められています。

・日本の国際的地位の低下も気がかりです。経済が下り坂にあることは明らかで、GDPは今年中にドイツに抜かれ4位に下がる可能性があります。一人あたりのGDPで韓国に抜かれる日も遠くない様に思われます。それ自体が好いとか悪いとかいうことではありませんが、背景にはかつて誇った技術力の急速な低下があります。行き詰ってしまった経済成長

路線の在り方とは違った道を探る必要があるように思われますがどうでしょうか。

・このような状況下であって、あらためて若者が元気に明日をめざして歩むためにどうすればよいのか、こ

れについてしっかり考える必要があるように思われます。男女平等やハラスメントなど様々な問題もあります。今日は個々人が気になるさまざまな問題について意見交換できれば幸いです。

<意見交流>



* 疑問に思うことは幾つもある。日米地位協定を変える必要がある。閣議決定で全て決ってしまうのはおかしい。国会の審議は何のためにあるのか。他人のことを気にかけない社会になっている。さらにシングルマザーの様に、困っている人たちの姿が外から見えないことである。隠れている悪い側面が可視化される必要がある。投票率の低さも気がかりである。多くの人が政治に関心を持っていない。

* 閣議決定には腹が立つ。憲法を守る、もっと正確に言えば、憲法または憲法の精神を活かす政治をめざす必要がある。しかし現実にはその反対の事が起きている。世界中で国家間の対立、緊張が高まっていて、「新しい戦前」を論じる人たちもいる。自分たちの世代が学んだことを次の世代に伝えることができなかつたことが悔やまれる。

* 閣議決定で決めて、それをそのまま国会で承認するのであれば、国会が十分役割を果たしているとは言えない。政府がやること、政治の在り方を決めるのはあくまでも国会である。

* ウクライナの戦争の余波で、今世界でエネルギー資源の確保が大きな問題になっている。石油や天然ガスにたよる現状を克服するために、安全を確保した上で、進化した新型の原発を建設することには賛成である。

* 自分は全く悲観的で、日本の将来に関して希望を持つことができない。政府は到底国の借金を返すことが出来ない。崩壊を待ってシステムを変えるしかない。

* 絶望的に悪い状態である。選挙で負けてはいけない。国会でほとんど議論しないで決める政治を変えなければならない。本当に敵基地を攻撃することが最大の防御と言えるのか。エネルギー資源の供給において、一つの国に極端に依存してはならない。

* 日本は54基の原発を抱えている。原発が攻撃を受けたらどんなことになるのか。想像すると恐ろしい。

* 二、三年前までは、問題は色々あっても何とかなると希望を持っていた。現在は幻滅している。アメリカ、そしてつい先日、ブラジルでは、大統領選で敗北した前任者の支持者が議会に乱入する事件があった。話し合うのではなくて、実力行使で自分の要求を実現しようとする人たちがいる。民主主義が崩れ始めている。今は向うべき方向が見えない。

* 先日、十六プラザで“クリスマス会”が開かれて、ウクライナから避難して来た家族が参加していた。生々しい体験を語る小学校3年と4年の姉妹の言葉にはリアルに伝わる力があつた。彼らには住居が提供されているが、一年限定で、その後どうなるかはまだ

決まっていなかった。家や故郷を失った人を具体的にどうやって助けるか考える必要がある。

*原発の再稼働を廻って、原発を抱える地域では住民の分断が深刻になっている。大きな金が動く原発利権を確保しなければという誘惑は大きい。

*どの社会も、外に敵を作ると不満の声は沈黙し、内にまとまる。何の意図が隠されているのか見極めることが重要である。

*日本人は簡単に“オレオレ詐欺”に引っ掛かる。今、社会全体が騙されている様な状態にある。ウクライナの惨状を見て、多くの国民はロシアや中国の脅威に備えなければならないと考える。敵基地攻撃能力の議論は、アメリカの求めに応じて、ウクライナ戦争の前から進められていた。ウクライナ戦争は都合のよい口実として使われている。権力者は恐ろしい。日本は民主主義のレベルの低さを露呈した。旧統一教会の問題は色々な意味で日本社会の弱点を露わにした。

*先日、“ラーゲリから愛をこめて”という映画を見た。高校の日本史の授業は大正デモクラシーまでしか学ばなかった。だからシベリア抑留について何も知らなかった。今、18歳の若者は選挙権を与えられたが、どうしていいのかわからない状態にある。若者に戦争の事や過去の過ちを伝える必要を感じるが、戦前がどうだったという話をしても反発を招いてしまう。どうしたら若者に伝えることができるか方法を模索している。分かる様に説明するのは容易ではない。

*先程、国は財政的に破綻していて、国の未来は暗いという話があった。正確に言えば、政府の借金であって、国、即ち日本国民の借金ではない。大半の国債を所有している者は日本国民自身で、国債はそれらの人々にとって資産である。年末に呼んだ新聞記事によれば、日本企業は総額で五百兆円ほどの社内留保金を抱えている。年金積み立ての総額は5年分ほどあるという。また日本人の海外資産を含め資産総額は二千兆円を大きく超える額になるらしい。使うあてもなく漠然と貯め込んだお金は存在しないに等しい。これを効率的に分配して消費に回す様にすれば、経済は好循環する様になるのではないか。

*ウクライナの政界の腐敗はひどく国民はうんざりしていた。政治とつながりの無かったゼレンスキー氏は政治家たちの腐敗を批判して大統領に選ばれた。当



初、ロシアとうまくやろうとしたが、成功しなかった。

*数年前電通で、そしてつい最近NHKで、多忙すぎる仕事に追い込まれて、社員が自殺する事件があった。日本は労働時間が長すぎる。日本人の多くが仕事に追い回されて、政治や社会の問題を考える時間を持っていない。今こういう現状を改めて、職場を働きやすい場にしようとする動きがある。展望が開ける可能性もある。

*ウクライナ情勢が読めない。色々な思惑から情報操作がある。本当の事が分からない。

*人間は自分が知りたいことを知ろうとする傾向がある。自分の世界観に合致する情報を好んで吸収する。そのために見たいもの見て、聞きたいものを聞いてしまう結果となる。だから自分を疑い、自分の立場を相対化する余裕が欠かせない。SNSの普及によって様々な情報が氾濫している。政府から独立して活動しているメディアは、情報提供を受ける人々の信頼を失えば、事業として存続することが危うくなってしまふ。だから無かった事をあったと言ったり、あった事を無かったと言ったりすることは基本的にない。但し事実をどのように評価するかは別問題である。それにはそれぞれの立場が反映される。

*情報は過去においてはしばしば隠された。今は情報があり過ぎる。事実と真実は同じではないと思う。実際に起きたこと、出来事を伝えることが事実を伝えることである。でも出来事の背景には、様々な事情がある。事件、出来事の背景にある事情を伝えることが真実を伝えることである。山上徹也氏の犯行は事実、その背景にある動機は真実と呼ぶことができる。

*人間の脳は外的な刺激を決った形で受容する様にできている。だから騙そうとする意図を持つ者によって、簡単に騙されてしまう。錯覚を起こしやすい人間

を相手に、奇術が芸として成立するのはそのためである。従って用心する必要がある。日本の敵基地攻撃能力は元々トランプ政権で出てきた話。時の国務長

官工スパー氏は軍需関連企業の出身だったことを考えると、なるほどという話である。

<意見交流の最後に> 吉田千秋

・今回、皆さんに提供した資料の中に、正月の中日新聞に掲載された内田樹氏のエッセイが含まれています。但しそれを資料として選んだのは、彼のエッセイが気に入ったためではありません。内田氏は希望的な予測という形で日本を含め世界が直面する様々な問題に言及しています。内田氏の論評には、問題にどういうふうに関わっていくかといった主体的実践的な視点が欠けています。今求められていることは、当事者として現実の問題とどのように向き合っていくかということです。人生を価値あるものにする為には、楽しむだけでは駄目で、自分がどう生きるかを考える必要があると思います。

・正直に申し上げ、ボクの中にも、現実を変えることは極めて困難で、どうしようもないという思いがあります。「それでもできることをやるしかない」というのがボクの立ち位置です。哲学を学ぶ私の師匠であった真下信一さんは、戦中、治安維持法違反で、獄中生活を余儀なくされました。しかしどんなにひどい思いをしても挫けることなく、信念に忠実な人生を生きることを忘れないで生きて行く人でした。時代を変える様な大きな事はできないとしても、歴史の現実と向き合うことはできます。

・日本を含め世界は今大きな転換点にあります。歴史を真の意味で前に進めるために何かをする必要があります。一人ひとりが諦めないで粘り強く取り組めば、大きな力になるはず。ジョン・レノンの曲“イマジン”に次の様な一節があります：「争いは終わる、望みさえすれば」。シンプル過ぎる文句ですが、重要な事だと思います。歴史にアンガージュ(参加)する、現実の問題に主体的に関わるということです。

・こんな歩みになることを期待しながら、これからも、様々な事柄に関わって生きたいと考えています。騙されない様に注意しながら、その都度主体的に判断しなければなりません。新しい事に目を閉ざさないで、常に勉強することを忘れず、他人の意見に耳を傾け互いに学び合うことが重要だと思います。そのためにこの「哲学カフェ」が少しでも役立つ場になれば幸いです。



1,29 朝焼け庭

<1月例会感想、意見、便りなど>

○<いま思っていること>



1.29 野鳥餌台

電気代が高くなり、物価が上がる今だから、やっぱり安倍元首相の公費を使う国葬は必要だったのかと疑問。様々な施策は適切な使い方しているのか？ それで財源がないからと増税するなんておかしい。ただ、よく知りもしない私だから思う疑問かもしれません。議員の給与をサラリーマンの平均年収にするとか、庶民的感觉を養うため。必要経費は別として。地位と名誉とお金が欲しい人

が議員にならない工夫にもなるかも。

この状況が続くと不平不満が噴出するのではないかと危惧します。そのエネルギーを良い活動をする人と、悪い活動をする人にと二分される混とした世界になりそうです。だから、時々自分を省みることが大事だと思っています。

私の不満を噴出してしまいました。穏やかな年になるように願います。
(Takako)

○<1月例会に参加して>

世界には、武力で自国への利益と権利を得ようとする一部分子と国の代表がいる。他方、今までの幾多の戦争の反省の上に立ち、平和を「平和的」な力で実

現しようとする勢力がある。平和勢力の一員を自認する私は平和を目指す働きかけを永遠にとは言わないが、これからも長く続けていきたい。

(アダムスミス)

○＜歴史的な大転換を迎えて＞

「通信」1月号のタイトルにあるように、今を生きる人々は、まさに「歴史的な大転換」にいるのではないかと、ひしひしと感じている。ウクライナへの戦車支援の問題は、イギリスがチャレンジャー2を供与するとして時点で、ほぼドイツのレオパルト2の提供などは決定していたのであろう。アメリカのエイブラムスもこれに続くことになる。

昨年2月のロシアによる侵攻開始から今日に至るまで、既定路線の通り事態は悪化して、時が過ぎるにつれて、その選択肢は日々狭まってきている感が強まる。例会では「どうしようもない」との諦めの意見が多かったのも無理はない。人類滅亡までの「終末時計」も最短の90秒になったらしい。われわれ一人ひとりにできることは、何もないかもしれないが、せめて目を背けることはなく、日々世界で起きている事象に関心を持ち、無力さを感じつつも、自ら判断する力を身につけていけるようにしたい。

今年1年も、そうした気持ちを失うことのないように真摯に毎日を送っていく決意を新たにしたい。

(ryosa)

○＜「映像の世紀:ナチハンター」を観て＞

昨秋、新聞で101歳の元ナチ党員が刑務所に収監されたとの外信ニュースを読み、12月NHK・映像の世紀「ナチハンター 忘却との闘い」を観た。戦後77年経っても戦争に向き合い続けるドイツ。一方、日本はどうか？ A級戦犯の岸信介が戦後12年目に首相にまでなり戦後政治に影響を与え続けた。昨年7月に凶弾に斃れた安倍晋三元首相は岸氏の孫だ。調べると戦前権力の中枢にいて、戦後、戦犯に問われるも米国に忠誠を誓って政財官界に返り咲いた連中がゴロゴロいた。今もその孫らが永田町の赤絨毯を闊歩している。

岸田氏はそんな連中に担ぎ出され首相となり、皮肉な歴史的事件を背景に対米従属を強め、大軍拡と軍事費倍増を推進しバイデン大統領に褒められ悦に入っている。「新しい戦前」を迎えた今、歴史に向き合うことのない日本、そのツケを国民はどんな形で



1.29 朝焼け空

払わされるのであろうか？ (三戸光則)

○＜国民の「生命維持装置」を外すのか＞

経済学者の金子勝氏は、以前から近年の日本の政治経済を、「出口のないネズミ講」だと言ってきた。そして、先月の岸田内閣による大軍拡を柱とする安全保障政策の大転換は、その破局を早め、カタストロフィー(大惨事=国民経済の「生命維持装置」の崩壊)となる、と警告している。

氏は、その兆候が既に国債の金利上昇や物価の上昇に現れているという。日銀はデフレ脱却を掲げた長年の超低金利を変更し、先月国債金利の上限を0.5%までとしたが、それでも国債を手放す(売り)動向が続き、この1月13日にはついに0.54%の取引も発生した。国債の金利上昇は、政府の予算(歳出)の国債利払い費の増額に直結し、社会保障や教育などの生活関連予算を否応でも圧迫する。

物価では東京都の消費者物価が12月値で4%UP、賃金が長期に減り続ける中での物価高は、国民の忍耐の限界を超え始めた。一方企業物価は10%越え、アベノミクスのブレーンと目された高橋洋一氏ですら、「物価上昇が3%を超えたら危険だ」とも述べていた。この面でももう制御不能領域入りで、「円安相場期待」の「他力本願」状態だ。

そして、ここへきて岸田内閣の「大軍拡」=兵器の爆買い、安倍時代の後払いも含め、「お金の出所がない」のに、前代未聞の巨額出費の決定。「もうよしてください」と言う以外に言葉がない。

(フィリピンウオッチャー)

○＜国民間の分断と階層の流動性の低下＞

この国の一番の問題は国民間の分断と階層の流動性の低下にあり、少子高齢化はその結果のような気がします。具体的には前者では正規労働者と非正規労働者間の対立、個人事業主とサラリーマンとの間の思考、行動様式の違い、公務員と民間との格差な

どが思いつきます。そして有利なポジションに入ることのできた人は、その小さな既得権益を守ることにエネルギーのほとんどを使い果たしているような気がします。後者で言えば自民党の世襲議員の割合は4割近くに達し、北朝鮮の政治体制を批判する人を見るとバーカと、一言言ってやりたい衝動に駆られます。

これらのことを考えると絶望的な気分になり、解決

方法はどんな副作用があるにせよ現システムの破壊しかないと思います。日本は歴史的に見ても明治維新[司馬遼太郎の書いていることは大うそです。]や、第二次世界大戦の敗戦など、外からの力によるシステムの破壊でしか変化できない国ですから。そして一番重要なことはその副作用の対応策に何があるのかを考えることだと思っています。(たなか)

<この一本> 瀬々敬久監督『ラーゲリより愛をこめて』2022年制作、公開中

第二次世界大戦終了後、不当にシベリアの強制収容所に抑留された約60万人の日本人が残酷な日々誰かが絶望する状況下において、ただ一人、生きることへの希望を捨てず、仲間たちを励まし続けた山本幡男の半生の実話の映画化。「いわゆる“戦争映画”ではありません。人間賛歌の映画であり愛の物語です」と企画プロデューサー平野隆氏は語っている。多分、ほとんどの日本人は、学校教育の歴史で、シベリア抑留を学んでいない、第2次世界大戦すらアヤシイのだから。そんな人達のための入門としても良い映画だと思う。

「あんな生ちよろいものではない！」と言われる方も多い、それも解る。ただ、知らない人には、頭ごなしでなく穏やかに語りかけないと、拒否されてしまうのも確か。その意味でも良い映画だ。

この映画で、個人的に二つ思ったことがある。1つは、親しくしていた遠縁が定年退職するまで、抑留されていたことをひた隠しにし、「左寄り」らしき気配には、異様に敏感であった。命からがら帰ってきた祖国で自分の半生を語れなかった哀れさを思った。その思想教育を映画は、しっかり映し出していた。

2つ目は、UNESCOにMemory of the World

がある。当初、日本国は、これを「記憶遺産」と訳した。韓国は「記録遺産」と訳している。「記憶」は、変化する。だから『記録』と訳した方が正しいと思っているが、この映画では、遺書(記録)が記憶に変えられて遺族の元に届けられた。この映画は、「記録」には、心が無いが、「記憶」には、心がついてくると私に気付かせてくれた。

さて、記憶遺産として登録された舞鶴引揚記念館では、「帰国の際、文字で書いたものは、持ち出せなかった。密かに隠してやっと持ち出せたもの(記録)がここに展示されている」と断り書きがある。だから、展示物は、他所の「Memory of the World」に比べて、非常に少ない。しかし、その少なさが、立派な「Memory of the World」だと思ったことを付け加えておきたい。(平井花画)



<この一本> 成島 出監督『ファミリア』2023年制作、公開中

日本に働きに来た外国人との共生をテーマとする話題作。舞台は豊田、自動車産業が広がり、多くのブラジル人労働者が集住する地区もある。主人公は50代の男誠二、焼き物で細々と暮らしを立てている。そこに街のチンピラに追われたマルコスが逃げ込む。

マルコスの父は地域のブラジル人のまとめ役で、リーマンショックの不況で外国人労働者が真っ先にクビを切られた際、生活の道を断られた人と会社や役所の間に入って奮闘したが、心労がたたって自殺。周りに助けられながら育ったマルコスは、日本語が不自

由で学校はドロップアウト。中卒では不安定な職にし
か就けず、「夢などない」と心を尖らせていた。

日本に不信感を募らせたブラジル人青年が群れる
とチンピラに目を付けられ、ケンカを売られる。やり
返せば警察沙汰となり、強制送還となる。彼らには不
当な要求や暴力に耐える以外に生きる道はない。次
第に彼らの追い込まれた状況を理解するようになった
誠二は、捨て身の反撃に出る。……

ある意味で日本ではよく起こってきた事だ。在日韓
国人・朝鮮人、「ジャパユキさん」、昨今ではスリランカ
のウィッシュマさん、外国人を一人の人格を持つ人間
とみなさず、労働者として使い捨てにしても意に介し
ないひずんだ社会で悲鳴を上げている人々の話だ。

映像ではマルコスらに執拗に繰り返された暴力が、

下手人はチンピラで
も、このならず者の後
ろ盾になっているのは
日本という国なのだ！
と訴えているようだ。
この現実を直視しろ！
と強く迫っている。

エピローグは息子を
失った誠二が、マルコ
スに陶芸を教えること
にするくだり。この新
しい『ファミリア』の予
感に、少し心が救われたが、重い課題が残った。

(大橋健司)



この一冊 望月衣塑子+白井聡 著 『日本解体論』朝日新書、2022年8月刊

本書は、元首相の菅氏を記者会見で追いつめた
最先端の東京新聞記者望月衣塑子さんと、戦後日本
社会の根本構造を『永続敗戦論』で解明した気鋭の
政治学者白井聡さんとの対談を取めたものである。
いま日本が抱えている様々の課題について語ってま
らうには、この二人が最もふさわしいのではなかろ
うか。

話題は、戦前日本の国体・戦争犯罪を根本的に否
定しきれなかった戦後日本の基本構造から始まり、
いま覆っている政治的劣化と「政治的無知」に言及
し、その要因ともなっているメディアと学問の批判力
の喪失に迫る。さらに、東京五輪や外国人労働者へ
の対応で露呈した人権意識の低さを取り上げ、最後
にロシアのウクライナ侵攻と、それに乗じて戦争の恐
怖・脅威を煽る日本政府の危険な対応を俎上に載せ
ている。

ともかく歯に衣を着せない二人の発言は舌鋒鋭
く、実に痛快である。今日本の国家は衰退・解体過程
にあるという共通認識に立って、白井は言う、「今日
の日本では民主制がマトモに機能するはずはない、
とはっきり言わざるを得ない」と。望月も、「権力に迎
合している、と疑われた瞬間に市民からの信頼は失
われる。それは日本の社会にとっても最も不幸であ

り、罪作りだ」と。そし
て二人は、「よき明日
のためには批判こそ
が必要だ」という観
点を貫き、私たちにあら
たな知見、ヒントをた
くさん提供してくれ
ている。

なお、この対談はウ
クライナ戦争開始後
に行われ、校正時点
に安倍元首相の銃撃
死事件が起きた。あ
とがきで白井は、「こ

この事件は単なる個人的動機に解消されるものでは
ない。これを機に、日本の保守政界と統一協会の癒
着を解明することは、日本の腐敗した統治構造を解
明することになる」、と喝破している。

いま岸田内閣によって提起された<大転換>によ
る「戦前帰り」を許さないためにも、本書をぜひ手に
して欲しいと願っています。

(Sensyu)



哲学カフェ 第28期(2022年後半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第175回例会 1月12日(木)	「新年の抱負、展望を語る」 *2022年はロシアのウクライナ侵攻開始から長期化する戦争の一年。 *新年はどのような年にしたいのか、展望ある年にできるか。語り合おう。	終了 しました
第176回例会 2月9日(木)	「いかに食糧自給率をあげていくのか・・・このままでは危ない！」 *日本の食糧自給率は38%で、世界でももっとも低い水準。どうすればよいのか。 *米食を増やす、食品ロスを少なくする・・・根本は農政の抜本的改変ではないか。	
第177回例会 3月9日(木)	「人工知能(AI)は人間社会にどのような影響をもたらすのか？」 *人間の言語や判断能力を組み込んだ人工知能(AI)は、急速に進歩し、様々な分野で、大きな影響を与えている。 *AIは人間の手助けから、人間に取って代わって多くの分野で人間を不用にする・・・その功罪を考えてみよう。	
第178回例会 4月13日(木)	例会テーマ:提案願います	
第179回例会 5月11日(木)	例会テーマ:提案願います	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしく願います。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや



アラカルト

★新年の干支は兔。ピョンピョン跳ねる兔を想像して、飛躍的な縁起を担ぎたいものである。しかし、ロシア・ウクライナ戦争もコロナパンデミックも終息の兆しが見えない。新年の抱負を語れと言われても、元気が出ない。それでも、ここで希望を失ってはならない。「絶望は死に至る病」と、哲学者ケルケゴールは言っている。世界と日本の情勢を冷静に見据え、将来を見通さなければならない。

★そのためには、「Globally Thinking, Locally Doing」の心構えを持ちたいものだ。地球規模でものを考えることは大事だが、何をどのように実践するかも問題。昔から、「大問題の解決には、隗より始めよ。」とか。

★私事で恐縮だが、今年82才を迎え

る私の場合、6年前に資格を取得した「白川(古代)文字学・漢字教育士」の立場で、今年も何かできるところからやりたいと思っている。全国でこの「漢字教育士」は今や1000名に達しており、「白川文字学」の普及と啓蒙に邁進している。かの著名な俳優でもありタレントでもある武田鉄矢氏は、「名誉漢字教育士」でもある。ありがたいことに、時折テレビ「白川文字学」の宣伝をしてくれます。

★漢字は日本文化の基礎。私も、エバンジェリストの一人として、地域社会で「白川文字学」の啓蒙に努めながら、反戦・平和活動を継続したい。因みに「兔」(象形)を基本字形とする「漢字家族」には、「逸脱」の「逸」、「冤罪」の「冤」、などがある。それぞれの古代文字の意味と成り立ちは、白川静監修の「字通」に説明されており、それぞれのつながりも理解できて面白い。

(島田幹夫)